遺跡見学会報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2931

遺跡見学会報告

宮崎浩輔（学部３年）

12 月 4 日、3 限・4 限の考古学実習の一環として、考古学研究室の教官 4 名、学生 23 名での遺跡見学に出かけた。寒風吹きすさぶ中、見学途中にはあいにくの雨となったが、そんな天気の中で案内してくださった庄田さん、小西さんをはじめ市の文化財保護課や埋蔵文化財センターの方々に、この場を借りて感謝します。

〈桜田・示野中遺跡〉

桜田・示野中遺跡は桜田町と示野中町との境に位置する。発掘に当たられている金沢市埋蔵文化センターの庄田さんに案内して頂いた。まずプレハブ内にて実際の遺物を前にして、遺跡概要や遺物の解説を聞くこととなった。この遺跡は市道や農道を挟んで四つに区画分けされており、北側から時計回りにA区、B区、C区、D区と呼称されている。区画ごとに時代が特定されているわけではなく、弥生時代から鎌倉、室町時代に至るまでの様々な遺構や遺物が複数の区画にわたって出土している。

遺跡の中で確認された最も古い時期は弥生時代中期で、土器片が出土している。続く弥生時代後期には、溝や 4×5 mの掘立柱建物跡と考えられる柱穴が見つかっており、埋土中からは弥生土器や石鏃なども出土している。また緑色凝灰岩の破片も数多く出土している。これは隣接している出雲じいさまだ遺跡から出土している刳貫円盤と併せて、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての石製装飾品の製作を示唆すると考えられている。

古墳時代に属する遺構は、前期に属する４基のピットが A 区から発見された。ピットの底部は砂層で現在も湧水しており、おそらくは井戸であったと思われる。うち 2 基の底部からは土師器の壺や甕が置くように埋められていた。湧水点祭祀の一例であろうと思われる。解説の際に「置かれたように出土した」とおっしゃられていたこれらの壺や甕に私は非常に興味を覚えた。私は、祭祀に用いる土製品は破砕されると考えていたので、完形で見つかったこの例が珍しく思えたからである。どのような状態で出土したのか、自分の目で見てみたいと思った。残念ながら出土状況を実見する機会に恵まれなかったが、これらの土製品は祭祀用に特別に作られたものではなく使用痕の残る実用品であるとのことであった。なお、古墳時代後期の須恵器も出土しているが、この時期の建物は確認されていない。

次の奈良時代は、この遺跡のもっとも繁栄した時代の一つであろうと考えられる。A区から見つかっている掘立柱建物は東西 4.5m、南北 9mと大型である。その柱穴は一辺 1mの方形で、深さ 60㎝ である。また、柱穴の一つからは墨書土器が出土した。この建物の東西両脇には幅 70㎝、深さ 40㎝ の溝が西側の溝の中からは厚さ約 15㎝ の炭層が見つかっている。炭層中からは焼土や土器の破片が多く出土している。また、同建物の内側と西側にも一面に炭と土器が広がる浅いピットが見つかり、火を用いた祭祀跡と考えられている。この大型掘立柱建物の周辺には４棟以上の掘立柱建物も見つかっているが、検出状況から同時期のものではないと思われる。以上は A 区に見られる遺構だが、他の区画に目を転じると、B 区北辺では溝に囲まれた掘立柱建物が、C 区の南西隅では大型の柱穴がそれぞれ見つかっている。そのため、この遺跡における奈良時代の集落は北東から南西にかけて帯状に分布していたと考えられる。

続く鎌倉・室町時代に関する遺物としては、13〜15 世紀

にかけての珠洲焼のすり鉢や加賀焼の甕、中国製の青磁盤や青磁碗の破片が出土し、C 区は 15 世紀代の溝が見つかっているが、平安時代と同様建物跡などは分かっていない。

〈出雲じいさまだ遺跡〉

前述した桜田・示野中遺跡の北東に隣接する遺跡で、出雲町に位置している。この遺跡も庄田さんに案内して頂いた。時代は古墳時代から平安時代、1 基ではあるが江戸時代の溝も見つかっている。

古墳時代は、桜田・示野中遺跡でも見られたように井戸であったと思われるピットから置かれた状態の土師器の甕が２点出土したほか、溝の土中から前述した緑色凝灰岩製の刳貫円盤が見つかっている。この石製品の大きさは直径が 5.2㎝、厚さ 1.8㎝ となっており、石釧を製作する工程で出る残りかすである。隣接する桜田・示野中遺跡の出土遺物を鑑み、桜田・示野中、出雲じいさまだ両遺跡は、弥生時代から古墳時代にかかる玉造り集落の一つであったと考えられる。

恥ずかしながら現場に立つのは初めての経験で、発掘調査は気候との闘いであることも痛感した。また、様々に新鮮な体験もした。考古学とは現場に基づく学問であるということを改めて実感したように思う。今後は、現場からの新鮮な情報をより重視していきたい。